

---

【研究主題】世界史の授業において言語活動を充実させる一試み

【副題】言語能力の三側面に着目した指導を通して

【学校・団体名】宮城県小牛田農林高等学校

【役職名・氏名】教諭 鈴木 崇之

---

## 1 はじめに

文部科学省では、PISA2003の結果（読解力がOECD平均程度まで低下していることが明らかになった、いわゆるPISAショック）の公表以降、平成20、21年の学習指導要領の改訂をはじめ、言語能力の向上に関する様々な取り組みを行ってきた。しかしPISA2018や令和元年度の全国学力・学習状況調査の結果からは、依然として言語能力に関して課題が指摘されている。このような現状の中、新しい学習指導要領においても各教科等における言語活動の充実が一層強調された。子供たちの言語能力は危機的状況にあるが、これは小・中学生に限ったことではないだろう。

筆者自身「読めない、書けない」といった生徒の言語能力に関する問題を授業の中で感じていた。また、昨年度3学年を担当していた際には、特に履歴書やエントリーシートなどを添削する場面で「一体何を主張したいのかわからない」と強く感じる事が多々あった。上述したように、小・中学生を対象とした調査で課題が指摘されていることを、高等学校の進路指導で少なからず感じたということは、各校・各生徒で実態の差はあるにせよ、高等学校においてもそれらの課題を十分に達成できていないことの証左であろう。

平成30年に文部科学省から「Society5.0に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」が公表された。この中で、全ての児童生徒が習得すべき能力として、言語能力をはじめとした基盤的学力が示された。人は言語によって物事を捉え、思考し、表現をする。社会の大きな変革期にある今だからこそ、知的活動の基盤となる言語能力を、全ての教科・科目で高める手立てを探ることは、喫緊の課題であると言える。特に高等学校では小・中学校の成果や課題を踏まえながら、さらに発展拡充を目指していくことが求められる。そこで筆者が担当する世界史の授業で、この課題に取り組むこととした。

## 2 研究のねらい

世界史の授業で生徒の言語能力を高めるために言語活動を充実させる実践を行い、その有効性を探る。

## 3 研究の内容

本稿でいう言語能力とは、「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」で定義されている「言葉に関わる知識・技能や態度等を基盤に、「創造的・論理的思考」、「感性・情緒」、「他者とのコミュニケーション」の三つの側面の力を働かせて、テキスト（情報）を理解したり文章や発話により表現したりする能力」であると捉える。これはPISAで示されている読解力をも含む、広範な概念である。

実践では、言語能力の上記三つの側面に応じた言語活動を設定していく。ただしこれら三つの側面は独立しているものではなく、活動の中で相互に関係し合う複合的なものである。実践ではこの三つの側面をそれぞれ、「創造的・論理的思考」の側面は<歴史を見るためのキーワード>、「感性・情緒」と「他者とのコミュニケーション」の側面は<世界史ビブリオバトル>と<世界史日誌>で特に重点をおいてアプローチをした。

## 4 研究の実際

実践は令和2年度の2学年総合学科の世界史B選択者12名を対象に行った。世界史を学ぶのは全員がはじめてである。授業を行うにあたり、世界史という科目に対する理解を深めることと併せて、言語能力を高めることも目標とすることを伝えた。言語活動について苦手意識をもつ生徒も多くおり、怪訝な表情も見られた。しかし、そもそも歴史そのものが言語の上に成り立つものであり、言語能力を高めることは歴史的思考力を高めることになること、その逆も同様であり両者は相互補完的なものであること、また、これからの社会でいかに言語能力が大切かといったことを丁寧に話し、生徒にもその重要性を理解させた上で授業を行うことができるように配慮した。

### （1）実践<世界史ビブリオバトル>

「PISA2018のポイント」や学習指導要領では、読書が言語能力を向上させる上で重要な役割をもつことや、読書活動を支える学校図書館の活用必要性について述べられている。対象生徒に「月にどれくらい本を読むか」とアンケートを行ったところ、不読率（月に一

冊も本を読まない人の割合)は半数を超えた。また、県内の高等学校の学校図書館の一人当たりの図書の貸し出し冊数の平均は3.1冊であり(令和元年度みやぎの子供読書活動に関する学校調査結果 平成30年度実績)、勤務校の場合は、1.2冊(平成30年度実績)で大きく下回っている。これらの状況から、学校図書館と連携し、ビブリオバトルの手法を取り入れた世界史の授業開きを実施することにした。

ビブリオバトルとは、発表者が自分で面白いと思った本についてプレゼンし、聞き手はそれを聞いて一番読みたいと思った本に投票してチャンプ本(最多得票の本)を決める書評ゲームのことである。

自分が発表する本を選ぶ時も、発表を聞いて投票する時も、「面白いかどうか」ということが選択の基準となる。どういった理由でそう感じたのか、言葉を通して整理し自覚させることで、「感性・情緒」の側面を働かせる。「面白い」と一言で括っても、それらは疑問・共感・感嘆・驚異などに細分化できる。自分の思いをより明確な言葉で意識化させることは、興味・関心を高めることにつながる。また、本の魅力を伝え合わせることで、「他者とのコミュニケーション」の側面を働かせる。

授業は以下の流れで行った。なお、①、②で一時間、③は課題とし、④、⑤、⑥で一時間をかけた。

#### ① ビブリオバトルの説明

ビブリオバトルを聞いたことがあるか?という問い掛けに対して、ほとんどの生徒が聞いたことがないと答えていた。そこでビブリオバトルの説明をした後、実際の発表の様子を動画で見せ、活動のイメージをもたせた。

#### ② 本を選ぶ

学校図書館で興味のある本を選ばせた。「世界史に関する本」に限定したが、内容が難しい本だとかえって授業や読書に関する抵抗感を強めてしまうと考えた。昨今歴史を題材にした漫画が多く出版されており、勤務校の学校図書館にも多く蔵書がある。そこで漫画であれば心理的なハードルも低くなると考え、「気軽に漫画を選んでいいよ」と声をかけた。

#### ③ ワークシートを完成させる

本来のビブリオバトルでは、発表のための原稿は作成しない。しかし、今回は感じたことを明確に言語化して整理させるため、タイトルやあらすじの他、次のような項目についてまとめさせた。

- ・お気に入りの登場人物とその理由、もし自分だったらどう行動するか
- ・お気に入りのエピソード、その理由
- ・自分が感じた現代との違いや共通点
- ・この時代に行ってみたいか、その理由

「自分が感じた現代との違いや共通点」や「この時代に行ってみたいか」といったように、歴史的な視点からも考えさせた。歴史上の人物に自分を重ね合わせたり、現代との比較をしたり、「自分ならどうか」と置き換えて考えさせることで、生徒の歴史に対するエンパシーを刺激し興味・関心を持たせた。

【この時代に行ってみたいか・それはなぜか】

「うん、行きたいです。今と違ってとても不便に感じてもいいし、人の純粋さや真実さを感じたいと思います。だからです。」

#### ④ 発表をする

3分以上、4分以内で発表させた。感染症予防の観点から、発表者にはiPadのインカメラに向けて話をさせ、マイクで声を拾い、その様子をappleTVを用いてスクリーンに投影した。

聞き手には簡単なメモを取らせた。ワークシートをただ読むだけの発表にならないよう、発表の時には何も見ず行うように



指示をした。聞き手に問い掛けたり、ユーモアを交えて話をしたり、事前にワークシートに整理していたため余裕が生まれ、創意工夫をしながら発表をしていた。優勝を決めるというゲーム性が、健全な競争心や向上心を刺激し、活動をさらに真剣なものにしていた。

#### ⑤ 投票

一人一票で投票を行った。投票用紙に選んだ理由も書かせることで、ここでも自分の考えを言語で表現させるようにした。

#### ⑥ 結果発表と感想用紙の記入

結果を集計したところ、一位が複数選ばれた。生徒の感想には以下のようなものがあった。

私は初め、本を読むのが苦手なのに本の内容をメモ見たりせずに皆に紹介するんがどうなのかとこころを悩まして。ですが、今回紹介した本はマンガになっていてこころが分りやすいので何回か読んでいくうちに理解していくことができて。自分が作りたい本を皆に伝えるんがどうなの。普段、本を読まない人は何回か読んで、今回マンガが本なら読むのもいいと思うんがどうなの。これを本後についでいいと思う。いす。

生徒の多くが、本を読み内容をまとめることや人にわかりやすく伝えることなどを苦手としていた。しかし、この活動を通して、それらについて前向きになった様子が見えてきた。普段、生徒たちは自分の感情を「やばい」、「エモい」といったように短い言葉で表現する傾向がある。相手に伝わるように自分の思いを丁寧に表現することの難しさと、楽しさを感じていたようである。また、漫画という生徒からするとなじみ深い入り口から活動に入ったことで、歴史に対する興味が高まっていた。学校図書館について、入学後のオリエンテーション以降一度も行ったことがないという生徒が何人もいた。しかし図書館での活動を行い蔵書に触れたことで、自分から足を向けるようになった生徒がいた。

言語能力の二側面を働かせたのはもちろん、学校図書館の活用から、読書活動推進の契機ともなった。

## (2) 実践<世界史日誌>

自分が感じたことを根拠も整理しながら言語化するためには、事象について事実に基づき正確に理解した上で、それを解釈し自分の言葉で再構成できることが必要である。授業が終わるごとに、持ち回りで授業内容のまとめ・ポイントと、感じたことを整理させる日誌を課題として取り組ませた。次の時間の導入3分程度で、作成した日誌を基に発表をさせた。約2週間一度の頻度でそれらの日誌を抜粋し、授業通信として生徒にフィードバックをした。日誌に自分が感じたことをまとめさせることで、「感性・情緒」の側面を、発表させたり、自分の書いたことが授業通信を通して他者に伝わることを意識させたりすることで、「他者とのコミュニケーション」の側面を働かせた。

### ① 日誌の作成

次の図はアメリカの南北戦争に関する日誌の一部である。この日誌をまとめた生徒は、授業の前に奴隷解放宣言や南北戦争について自分で展開を予想していたが、実際はそれとは違ったことに驚きを感じていた。また、黒人差別について、現代にまで言及しながら差別についての自分の思いを書いていた。

<b>ポイント</b>
この戦争により、アメリカは、国家の統一を回復し、中核国へと再び成長した。しかし、奴隷制の廃止により黒人に選挙権が与えられたが、実際には行使できず、シヤアローハムと名乗る者が多く、クランズワンのような団体が
<b>感想(なぜそう思ったか)</b>
南北戦争でリンカーンの奴隷解放宣言は知っていたものの、その理由が、奴隷制を認めるかどうかがあったり、戦争を有利にするためだったり、自分の予想とは大きくはずれていて驚きました。また、黒人差別は現代でも根絶しきれないため、差別を無くしていき互いの意見を尊重し、向き合うことが重要ではないかと思いました。

### ② 発表

はじめのうちは日誌にまとめた内容を読むだけだったが、次第に時事的な内容も含めて自分の意見を話すなど、発表に工夫をこらす生徒が出てきた。前述した日誌をまとめた生徒は、令和2年5月にミネソタ州で起こった、白人警官が黒人男性を死亡させた事件とそれをきっかけにしたデモや、アメリカにおける新型コロナウイルス感染症による人種間の死亡率の差など、現代の問題とも重ね合わせながら発表をしていた。内容を整理することで一段深いところまで理解し、さらに他の事象とも結びつけて問題意識をもつことまでできていた。日誌を書きっぱなしにするのではなく、発表の時間を設けたことや持ち回りにしたことで、集団に対しての責任感や、「他者へ自分の思いを伝えたい」という強い気持ちが芽生えたようだった。

### ③ 授業通信の発行



タイトルは、14世紀のムスリムの旅行家がまとめた「三大陸周遊記」という書物からとり「全大陸周遊記」とした。日誌のうちよく書けているところにはコメントを付記するなどした。授業の振り返りになったのはもちろんだが、

他の生徒の書いたものを見てまとめ方の参考にしていった。回を重ねるごとに日誌を書くことも上達していった。こういった理由でその感想をもったのか、ということもピックアップしていくつかを取り上げた。図にあるように、「多面的な視点」

など、生徒の感想をさらに整理して汎化・概念化したものに置き換えて示した。

### (3) 実践<歴史を見るためのキーワード>

「創造的・論理的思考」の側面を働かせることは、教科特有の「見方・考え方」を働かせることに他ならない。学習指導要領解説をはじめ様々な書籍では、これを働かせるための具体的な切り口が示されている。

世界史 B 授業通信	～全大陸周遊記～	vol.1 2020 / 7 / 1	発行：鈴木
イブンバットゥータ (1304～1368) モロッコ生まれの旅行家。約30年間にわたり、アフリカ、アジア、ヨーロッパを旅した。 彼の著作『三大大陸周遊記』は、当時の様子を知る旅行記としては第一級の資料である。			
【これまでの流れ】 英仏百年戦争→産業革命→アメリカ独立→フランス革命…ナポレオン (現在) そしてアメリカでは・・・			
そしてフランスでは・・・			
複雑な内容をコンパクトにまとめられました			
【歴史的事象の二面性について ～だが～である】 幾度となく繰り返された戦争や奴隷貿易の犠牲者の上に今の生活が成り立っているのは悲しいことでは、これがなければ今の生活が成り立たないという複雑な関係性です。 この産業革命が無ければ今は無いからといって複雑な産業が発展する裏で、随分目に合う人が居るからです。 ある出来事を、異なる立場から見るとまた違った意味を持ちます。 「多面的な視点」で物事を捉えることはとても重要です。			

授業ではこの切り口を、次の表のように歴史を見るためのキーワードとして整理し、ワークシートにこれを基にした記述式の設問を設定した。

【時期や年代】	【帰納と演繹】	【変化と継続】
【類似と差異】	【意味や意義】	【課題点や問題点】
【影響や結果】	【転換や画期】	【背景や原因】等

また、生徒が記述したものをiPadで撮影し、スクリーンに投影して全体で共有を図り、考えを深めさせた。ここでは例として二つ提示する。

### 例1【転換点】

フランス革命では、短い期間に政治・経済・思想などあらゆる面で大きく変動した。革命の複雑な流れを俯瞰し、自分の言葉で考察させ、転換点を定めさせた。

【転換点】 フランス人権宣言の部分
【根拠】 この宣言で、自然法に基づき、基本的な人権、国民権、私有財産権の不可侵などが盛り込まれたことにより、のちの「国民国家」に繋がったと思う。 これが今の私たちに多大な影響していると思う。 革命派の提唱した自由・平等・基本的人権などの理念は近代世界の根幹をなす思想として今日までも引き継がれている。
【転換点】 8月10日事件
【根拠】 国民公会の成立により、第一共和政が宣言され、そこから18世紀が変化した。ロバート・エールによる恐怖政治、テルミドールの反動など、事件前よりも人々の動きが大きく変化したから。

人権宣言などの理念が、それとも政体の変遷が、生徒によって着目する点は様々である。しかしそのどれもが、上記のように歴史的思考に基づく説得力のあるものだった。転換点という切り口を明示することで、複雑な内容を整理し論理的に思考することができたと考えられる。また、他者の違った視点を共有させることで幅広い視野を獲得させた。スクリーンに何人かの生徒の記述を映すと「なるほど、そういう見方もあるよね」という声が聞こえていた。

### 例2【問題点】

生徒は革命や改革により社会は常に進歩していくという印象をもっているが、社会的事象は多面的であり、時代が進めば問題点が浮き彫りになることがある。フランス革命後に成立した「国民国家」という概念について、問題点を考えさせた。前述したように政体や人権の理念など革新された面もあるが、同時に生まれた「国民国家」（一つの均質な国民が国家をつくる）という考えは、国民の定義から排除される人がいることも暗示している。次の図のように、鋭く考察した生徒が多かった。これは、その後展開していく民族の独立

問題を理解するための、極めて重要な足掛かりとなる。

均質には、品質などからみれば、等しいという意味がある。白人と黒人、身分による差など、人間を均質なものと捉えるのは難しいため、差別や対立が続くと思う。

問題点を意識させることで、次第に設問として設定していなくても、プリントの行間に「なぜ～なのだろう?」、「～では?」という言葉や、クエスチョンマークをメモとして書き加える生徒もいた。歴史を見るためのキーワードから思考させることで、これに基づいて先述の世界史日誌を作成するなど、言語能力の複数の側面を複合的に働かせる姿が見られるようになった。

## 5 研究の成果と今後の展望

### (1) 成果

実践を通して、日誌やワークシートなど生徒の書く文章がまとまったものとなり、その内容も次第に整理されてきた。また、授業中の生徒の発言（つぶやき）や行間に書かれた彼らのメモからも、感じたことを意識的に言語化したり、論理的に考えたりしようとする姿が見られ、実践の成果がうかがえた。

言語能力について、重要性は誰もが認めているが、それを改めて定義し、普段の授業で意識的に取り組んでいくことは多くないだろう。ましてや新型コロナウイルスの影響で、話し合い等授業中の言語活動が制限されるようになった。本実践を通して、ICTなども有効に取り入れることで、このような社会状況のなかでも言語活動を充実させる可能性を広げることができた。

### (2) 今後の展望

言語活動と聞くと、国語の授業をイメージする教員は多いだろう。しかし、実際は全ての教科・科目を通して重点的に指導すべきものである。教員間で意識や情報の共有を図り、時にはカリキュラムマネジメントの視点で指導にあたる必要がある。筆者が司書教諭を務めていることもあり、本実践で使用したビブリオバトルのワークシートに手を加え校内で共有した。勤務校では一部の学年で朝読書を実施しており、特別活動などではそれらの活動と関連付けた読書活動推進の取り組みも行った。今後、このようにして学校の教育活動全体で指導効果を高めていくことが必要と考える。

### 参考文献等

ビブリオバトル普及委員会“知的書評合戦ビブリオバトル公式ウェブサイト” <http://www.bibliobattle.jp/a/boutus> (参照2020/5/15)